

【研究ノート】

愛とトラウマ ～社会問題の起源～

小沢哲史

Love and trauma : an origin of social problems

Tetsushi OZAWA

要旨

本論文は、「愛とトラウマ～二重レンズ理論～（小沢，2015）」の視点から社会問題を検討し、またそのことによって二重レンズ理論を検証しようとした。愛とトラウマは個人の問題に留まらず、社会の歴史的变化の契機として機能している。人間は、教育を好例として、トラウマと愛情が対になった体験をすることが多く、それによって生じた心的構造を“擬似二重レンズ”とした。擬似二重レンズは、人間と人間社会が強迫的に過剰反復を行う源泉となっている。また社会的に被害者が盲点になる構図を指摘し、これを宮地（2007）の“環状島モデル”と対比する形で“富士山モデル”として論じた。“富士山モデル”は、愛やトラウマの伝達力不足を無視し、幻想で上塗りしてしまうが故に、負の連鎖を助長することを指摘した。

最後に、これらを乗り越えるために、乳幼児期の養育の重要性や、事実と実態を知ろうとすること、自ら愛とトラウマを表現し、また他者の表現を受け止めていくことの重要性に触れた。

キーワード：愛、トラウマ、二重レンズ、擬似二重レンズ love, trauma, double lens, pseudo double lens

1. 二重レンズ理論

1-1. 概要

二重レンズ理論は、人間に大別して2種類の認識や対処システムを想定し、それらが接合的に機能するのか、接合不全のまま解離的に機能するのかによって人間が他者や事物を認識し、対処しているという理論である（小沢，2015）。愛情レンズは社会文化的学習を担い、本来苛烈な環境や人や事物に対して、親しみや良い意味での鈍感さを実現しようとする。二重レンズの基底部にあるトラウマ・レンズは危機管理学習を担い、生物学的・社会的脅威に備える。愛情レンズとトラウマ・レンズは、乳幼児期に養育者等が自身の二重レンズ全体を用いて関わることによって接合（組織化）されていく。愛情レンズ単独の学びは、楽しく連想に富むが、統合的な理解を欠いた羅列に終わりやすい。トラウマ・レンズ単独での学習は、兆候だけに対して過剰警戒が生じるため、やはり形式に流れ、加害－被害に囚われた硬直したものになりやすい。愛情レンズとトラウマ・レンズ双方がよく接合された二重レンズ全体での学びだけが、矛盾やあいまいさ、さらにそれらに対する納得（情動調整）も含めて必要十分に学ばれ、応用に開かれている。愛とは、よく接合された二重レンズの成長促進的・生成的な学びであると考えられる。逆に接合不全の二重レンズ双方が機能している場合は、感情や認知が離散したままの状態にあり、現実の問題解決に直面して矛盾の露呈しやすいものである。

1-2. 病理

二重レンズ理論においては3種類の病理を想定した。まず(a)接合不全の病理であり、自分の感情や認知を自分自身の全体の中でふさわしい位置付けによって把握できず、感情や認知が不安定で、自己感に空虚さを抱える病理である。(b)トラウマ性の病理は、トラウマ・レンズの増殖と愛情レンズの欠損からなり、妄想、自傷、パニック、強迫行為といった過剰警戒の症候にかかわり、二重レンズの残存部分是否認、回避といった症候にかかわる。(c)溶解痕の病理は、トラウマを乗り越えた後、人や事物が意味を喪い、適切な処理ができないことからもたらされる抑うつや悲哀といった症候である。

2. 人間社会の形成と拡大

2-1. 擬似二重レンズ

通常、トラウマというと、事故や犯罪、災害など、突発性の単一事象によって、個人の処理能力を上回った場合が想定されがちである。しかし、それだけではなく、家庭や学校、その他の社会システム、戦場や強制収容所、友人関係や恋人関係などにおいて、より持続的で反復的なトラウマも知られている。そこではトラウマ・レンズが増殖するだけではなく、愛情レンズも増殖しているのである。例えば、虐待と愛情、‘いじめ’と‘ふざけ’が並存し、暴力とその正当化、教育と教育虐待が並存しているのである。

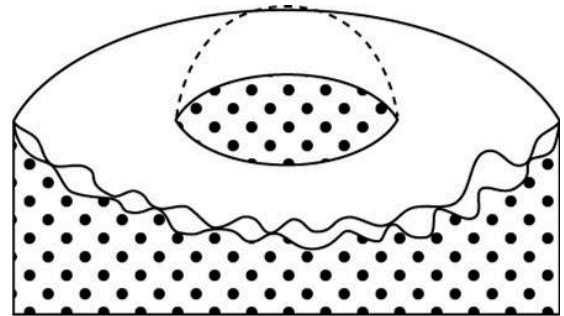


Figure 1 擬似二重レンズ

本論文では、このように増殖したトラウマ・レンズと愛情レンズが対になった状態を“擬似二重レンズ”と名付けて議論を進めていく。図においては (Figure1)、擬似二重レンズは中央部、すなわちマイクロ・システムにおいて生じているが、例えば学校現場において生じた場合は、中央部から外れたメゾ・システムに擬似二重レンズが生じることになる。

擬似二重レンズは、小沢 (2015) の理論に新たな前提をつけ加えるものではなく、議論の便宜を図るための用語である。擬似二重レンズは、トラウマ・レンズによって過剰警戒が生じつつも同時に、愛情レンズによって親しみや良い意味での鈍感さが学ばれ、対になっている。擬似二重レンズは、他者や外界との接触が社会文化的学習を担う愛情レンズによるため、奇異な感じや病理を感じさせるわけではない。擬似二重レンズを備えた人々は、熱心なところを持った普通の人とされていることも多いであろう。

ここでのトラウマは、処理に支障を来したことによって生じるすべてを指し、人間関係や学校、職場、宗教や趣味など様々な現実との遭遇から擬似二重レンズが生じていると仮定する。そしてトラウマの再体験症状によって意志では止めきれない強迫性を帯びている。そのため機会があれば、継続 (再被害) するか、連鎖 (加害者への同一化) する。そもそもトラウマ性の病理には言語化困難が伴い、残存二重レンズは、トラウマの存在自体を否認・回避しているため、自覚に乏しいと考えられる。さらに擬似二重レンズの深奥に潜む接合不全の病理は、主に乳幼児期の病理であるため、他者だけではなく自分自身からも隠蔽されがちである。事故や犯罪、災害ならば、被害に遭ったということは、本人が否認症状によって記憶を喪っていたり、言語化困難があつたりするとしても、当該の事故等を確認した第三者からは明白である。しかし、持続的で反復的な状況では、並存する愛情レンズの学習成果によって、第三者だけではなく本人にとっても被害は明白ではない。本人からの隠蔽がわかりやすい例として、虐待に対する逆説的感謝、カルトによる洗脳、著名人等への熱狂的ファンを挙げることができよう。

教育（を受ける経験）は現代社会における典型的な擬似二重レンズ発生状況と言える。あくまで一例ではあるが、外科医を例にとってみよう。教育の積み重ねによって、外科医は手術中の患者を自分の感情から必要十分なだけ切り離している。外科医が手術中の患者の病気や怪我に対する恐怖に身をすくめたり、1人の人間として思いやりの涙を流してしまえば外科医としては手術に失敗するかもしれない。しかし教育は、外科医にそのような問いを立てさせることもなく、外科医は、人間的感情から必要十分なだけ切り離し、患者の手術に成功することができるのである。膨大な分業・協業関係のある現代において、擬似二重レンズは有益なことが多いのである。

2-2. “擬似二重レンズ”を通じた紐帯の発生

人間同士の紐帯は愛によって担われることがある。愛は二重レンズ全体を利用した全人的な学びであり、相手のあいまいさや矛盾、トラウマを受け入れて持続的に学び続ける。一方、愛は大きな負担が伴い、破局や別離は、個人全体へのリスクとなる。すなわち、二重レンズによる愛は大きな学びが得られる可能性と同時に、危険性も高い。また双方向の接触が保たれない状況では、学びは減衰していかざるを得ない。愛に基づく人間同士の紐帯は、負担と危険性、喪失の可能性から、集団規模は大きなものにはなり得ない。

一方、擬似二重レンズは、特定のトラウマ対象とそれに伴う愛情レンズの活動を通じた部分的なものである。そのため、全体的な二重レンズに基づく愛よりは、はるかに人間同士の紐帯は生じやすい。自他に二度とトラウマを体験させまいという思いを持って、教育内容を考案するトラウマ既往者がいれば、擬似二重レンズを共有する紐帯が成立する契機となる。トラウマだからといって、加害者と被害者という関係とは言えず、教師と生徒、上司と部下、同僚や同士と呼ばれることになる。愛情レンズが異なり、トラウマ・レンズが共有されている場合は、敵やライバル同士といったトラウマ性の絆が生じる。擬似二重レンズは、特定の内容や分野に限定して、制度化しやすいため、一対多といった非対称性や、大規模な一方通行が可能である。すなわち、擬似二重レンズによって、人類の分業と協業は大きな集団規模を持つことができる。

2-3. 社会における文化と病理の発生

愛とトラウマは、個人に留まらず、人間社会を発展させる機能を有すると仮定することができる。すなわち、外界や他者がもたらした様々な刺激を処理しきれない場合に、トラウマという形で心身に刻印し、その症状によって不可解と無知の領域の存在を周囲に知らせ、愛による学習と対処が行われた結果、人間社会に役立つ知識や技術、社会的制度、芸術文化が産み出される。人間社会にとって、個人の愛とトラウマは社会文化の発生と変化の契機なのである。

擬似二重レンズによってつながった人々は、トラウマのもつ強迫性の病理によって、再被害または、加害者への同一視を行い、部分的な支配や服従を過剰に反復する傾向を持つ。このような部分的な擬似二重レンズが、大量にモザイク状に人間社会全体を覆いつくし、人類は分業や協業によって生産性を劇的に増大することができたと言える。

擬似二重レンズに基づいて生じた集団は、部分的であるがゆえに、価値観、認識や学習、対応に何らかの歪みを持つことになる。また特定のトラウマの過剰警戒によって、反復が過剰になる危険性をはらんでいる。また、集団の外の人間に対しては全人的な学習が生じにくく、正邪が逆さまになる危険性もある。その結果、無自覚なままに、過剰生産、過剰消費、自然破壊、貧困、差別や迫害といった社会病理を発生させかねないのである。

2-4. 擬似二重レンズの個人差

事件、事故、犯罪にとどまらず、人は教育や文化、人間関係によってトラウマ・レンズを増殖させるが、擬似二重レンズ、そして残存二重レンズのあり方には、個人差が生じてこよう。

教育を例にとれば、そもそも擬似二重レンズが発生するほどには教えられず、また学ぼうとせず、最初から否認・回避するタイプが考えられる。学習者として有能ではないが、同時に教育によって人格に歪みが生じるわけでもない。あるいは、別のタイプとして、擬似二重レンズが生じるほどの教育を受けても、生来の二重レンズがよく接合されていれば、確かな自己感に基づいて、処理し損ねた学習内容がトラウマにならないままに学び切るタイプもいるだろう。さらに擬似二重レンズができるほど過酷な学習を行いながらも、状況や環境の変化に応じて自らの学びを相対化していき、擬似二重レンズを全体的な二重レンズに吸収してしまう者もいるだろう。

その一方、擬似二重レンズにおけるトラウマの病理と、接合不全の病理が併存してしまうタイプを想定することができる。トラウマの病理に加えて、接合不全の病理を抱える者は、高度な知識や技術を持ったとしても、感情や認知、自己感が不安定であるため、他人を騙したり騙されたり、支配・操作したりされたりしやすくなる傾向がある。とはいえ愛情レンズが保たれ、二重性を保っている場合には、外から見て日常生活に大きな問題がないことから、本人にとっても認識上の欺瞞が生じ、外挿的に自己が確立されていると信じることになる。その一方、否認・回避の手段として過剰消費や嗜癖行動、財産や地位の誇示等々の可能性がある。古代のピラミッドから、現代人の過剰消費まで、トラウマの病理と接合不全の病理の併存は、生産性と共に過剰な発散や誇示を要するものとなる。

3. 擬似二重レンズの社会文化論

3-1. 環状島モデル vs. 富士山モデル

二重レンズ理論では、愛とトラウマは、個人の認識の有無に関係なく、生きる上でのテーマであり原動力であると仮定している。しかし、それらを伝達しようとする、と、限界あるものとなる。日々地球上の隅々において表現が試みられているにもかかわらず、愛とトラウマについて「伝わった」とか「わかった」と言い切ることは難しい。しかも人は、伝達や理解が“無い”ことを自覚することに困難があり、埋め物や被せ物を用い、はるかに単純化した理解で済ませようとする傾向を持つ。

本論では、宮地（2007）の“環状島モデル”における環状島の上に‘雲’および幻想としての‘山頂’を配した“富士山モデル”を想定して検討する。“富士山モデル”と“環状島モデル”は‘外斜面’を共有している。‘外斜面’には、愛とトラウマに巻き込まれることの少なかった人たちの、わかりやすく安全な表現があり、“富士山モデル”は、‘外斜面’の表現が、そのまま頂上まで延長されているという幻想を有するモデルである。“富士山モデル”においては、愛に圧倒されている者やトラウマの被害者や犠牲者の居場所はなく、見えもしない。事実や実態としてあるのは、‘外斜面’までであり、幻想としての‘山頂’までの空隙は‘雲’で埋められている。‘雲’は認識の無さへの埋め物や被せ物であり、事実や実態を十分に伴わない仮想的、例外的事象であり、建前と詭弁が浮遊している。

“富士山モデル”は、中心部に行くほど高くなるという、わかりやすさを伴っている。そのため“富士山モデル”に沿った表現は、事実や実態と無関係であるにもかかわらず、リアリティがあり、伝達力が高い。一方、宮地（2007）が、犠牲者の位置を、‘内海’、被害者の位置を‘内斜面’として示した“環状島モデル”は、中心からの距離の次元と高さの次元は慎重に分けて考える必要があり、相対的にわかりにくく、相対的に伝達力の低いものである（Figure2）。

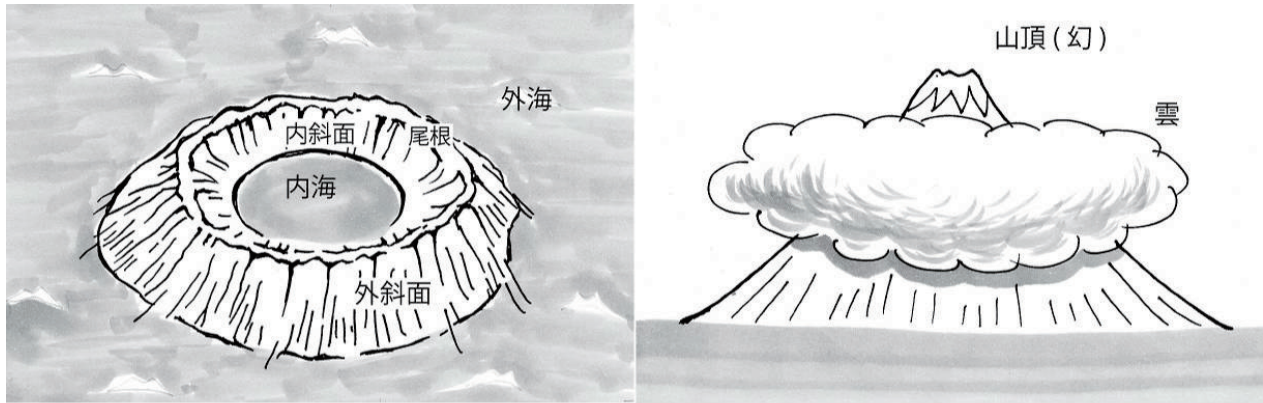


Figure2 環状島モデル vs. 富士山モデル

3-2. 盲点の形成

このような“富士山モデル”に依拠すれば、“環状島モデル”における“内海”や“内斜面”は存在しないことになる。“富士山モデル”は、“内海”の犠牲者や、沈黙あるいは不十分な表現しか持たない‘内斜面’にいるトラウマ既往者（被害者）に対する“盲点”を作り出す。“内海”の犠牲者は、もはや発言力を持たないため、闇に葬られるか、逆用されて‘聖人’として‘山頂（幻）’に祀り上げられる。トラウマ既往者（被害者）は、自分を語るための“立ち位置”それ自体を確定できないため、その表現は未熟で奇異で滑稽、支離滅裂な印象さえ与えかねない。まして接合不全の病理を抱えているとすれば、乳幼児期に自らの感情と認知に対して養育者から適切な言語獲得支援を受けていないため、適切な言語表現に困難を抱えているであろう。また山頂（幻）の‘聖人’へと祀り上げられた犠牲者と対比されてしまえば、現実の被害者の特徴は欠点の多いものとして捉えられるであろう。例えば、人間関係におけるトラウマの場合、被害に伴う重要な要素として、被害者と加害者との間には愛情レンズを介した関わりが生じやすいことを挙げることができる。加害者は、偽装工作として、意図的に被害者と愛情レンズを介した関わりを保つこともある。トラウマが生じた後、その関わりは、加害者を正当化するには程遠いものであっても被害者の非であると捉えられがちである。なぜなら“富士山モデル”においては、1つの次元において正しい者は他の次元においても正しいとわかりやすく仮定されているためである。結果として、トラウマ体験それ自体を有していない‘外斜面’の者たちは、‘内斜面’の者に対する持続的理解を放棄しがちになる。理解への持続的努力こそ愛の機能であるから、‘内斜面’は‘外斜面’からの愛が届かない無関心の領域となる。

愛についても、同様のことが言える。やはり‘内斜面’の表現があり、愛に圧倒されている者の語りは、未熟で滑稽なものであり、伝達力は不十分なものである。その結果、相手との関係は不安定なものにならざるを得ない。そこにもまた“盲点”が形成される。特に乳幼児が養育者に向ける愛は、大きなものであるにもかかわらず、表現は未熟で滑稽であり、養育者の認識の個人差はきわめて大きく、重篤な盲点となる危険性がある。

3-3. 社会的連鎖

愛やトラウマに圧倒されている者たちが、十分に伝達を果たせずとも表現し続け、言語化する苦闘を続けていけば、少なくとも周囲や社会に対して不可解や無知の領域の存在を提示することが可能である。しかしながら、不可解や無知を突きつけられることは、‘外斜面’の者たちにとってはストレスになりかねない。その時、被害者であるトラウマ既往者は、かえって加害者であるかのようにみなされるであろう。こ

のような経緯から、トラウマ既往者（被害者）は自分自身を認識し言語化する苦闘を放棄することも多かろう。その結果、犠牲者へと滑り落ちたり、再被害に甘んじたり、または自らが加害者側に立てる相手、すなわち傷のより深い者や乳幼児などを求めることになる。この過程で、トラウマ既往者（被害者）はかつての加害者をほめたたえる（「あのことがあったから今の自分がある。むしろ感謝している」）という逆説さえ生じかねない。また一方で妥当な事実や実態を伝える援助者がかえって憎悪されるということもあり得るのである。

このような負の連鎖の一方で、正の連鎖もあり得る。‘内斜面’から這い上がり、‘尾根’の部分に到達した者が行う伝達は、‘外斜面’からも、大きな理解と支持を得られ、“富士山モデル”においても、受け入れられるものとなる。このような‘尾根’の表現は、‘内斜面’の被害者を励まし育て、乳幼児にとっても成長促進的な機能を果たす可能性がある。

4. まとめ

4-1. 二重レンズ理論の特色

本論は小沢（2015）の補足的論考としてまとめられた。膨大な分業と協業に従事する人間は、個別の擬似二重レンズを通じて広範囲の他者と部分的紐帯をとり結ぶ傾向にある。擬似二重レンズは、私たちが学んできた教育や文化から生じる。教育や文化に強い影響を被る個々人は、トラウマの強迫性や接合不全による自己感の脆弱性から、職業や生活に強迫的に取り込まれ、過剰な反復に日々を費やす傾向がある。それらは、間接的にマクロ・システムを逼迫し、‘内斜面’の被害者を‘内海’の犠牲者へと追いやることもある。愛とトラウマは、無意識の領域に追いやられるだけではなく、偽りで上塗りされ、個人と社会の全体性と主体性を見失わせる。学術においても、過剰な細分化が、人間と人間社会に対する全体的な理解を阻んでいる側面がある。過剰な細分化は必然的な時代の流れであるものの、二重レンズ理論は、あえて人間と人間社会に対する包括的な理解を提案しようとするものである。

4-2. 乳幼児を育む

二重レンズ理論は、本論において論じた“擬似二重レンズ”と“富士山モデル”という視点から、改めて言語獲得期の乳幼児期の重要性、あるいは接合不全の病理の深刻さを示している。接合不全の病理は、自分からも社会からも無いことになってしまい、闇に葬られがちである。乳幼児ならではの逸脱的と思える感情や行動に対して、養育者だけではなく、社会をあげて受け止め、応え続けることで、幼い子どもたちが強く柔軟性のある認知・情動システム、学習メカニズムを自ら作り上げることをサポートすべきである。また言語は自他の共有のツールであることと同時に誤解のツールである。自身でも理由のわからぬ認知や思考に振り回されている乳幼児の未発達な言葉に対して、養育者をはじめ他者は適切にサポートすべきである。あくまで一例に留まるが、養育者の立場からみて望ましくない子どもの行動に対して「何をやっているの？」と怒りの言葉をかける養育者は多いが、「この子は、何をやっているのだろうか？」と養育者が自らに問いかけ、自他の立ち位置の違いに想像を巡らせて、子どもの気持ちに寄り添った言葉かけを重ねていくことが望ましい。

4-3. ‘雲’をかきわける

結局のところ、“富士山モデル”は、事実や実態としての“環状島モデル”の上部を隠蔽し、‘雲’や‘山頂’といった幻想で上塗りしたものに過ぎない。とはいえ、愛やトラウマのわかりにくさ、伝達力の低さの

代替となる‘わかりやすさ’を提示しているために、大きな伝達力を持っているだけである。したがって、まずは、‘雲’をかきわけて事実や実態を知るための知識やスキルを教え、学ぶことが重要である。ただし、一個人の能力で得られる知識やスキルには限界がある。それでも自分やあるいは周囲の他者が、擬似二重レンズによる強迫的で合理化された攻撃性のはけ口を乳幼児やマクロ・システムに求めることを止めていかなければならない。そのためには、個々人が、世界が富士山のようにわかりやすく美しいものではないことを受け止め、無知の領域を意識し続けることが重要であると考えられる。さらには、愛とトラウマを、間違いを恐れずに自ら表現し続けたり、他者の未分化な表現に対して耳を傾け続けたりすることが人間と人間社会を苦しめるトラウマを学びの契機としていくために大切であろう。

引用文献

宮地尚子（2007）．環状島＝トラウマの地政学 みすず書房

小沢哲史（2015）．愛とトラウマ ～生涯発達のグランドセオリーを準備する～ 和洋女子大学紀要，55，77-89．

小沢 哲史（和洋女子大学 人文社会科学系 准教授）

（2017年10月10日受付）